轉形期の人々

小林多喜二

一

轉形期の人々

小林多喜二著

古澤岩美裝

現代作家選
IV
昭森社

昭和二十三年一月十一日印刷
昭和二十三年一月二十日發行

現代作家選
5
人々の轉形期

定價七拾圓

著作者　小林多喜二
發行者　森谷均
東京都品川區東品川四ノ七四
印刷者　森藤里見
東京都品川區東品川四ノ七四
印刷所　東京印刷株式會社
東京都千代田區神田神保町一丁目三
發行所　昭森社
出版協會員A二一九一六三番

轉形期の人々

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

一

港の水は青々と深くて、底が岩質だつた。それで幾つにも折り重なつた火山質の山が直ぐ後にせまつてゐた。――小樽の街はその山腹の起伏に沿つて、海際を横に長く、長く延びてゐる。そして港を抱きこんでゐる兩方の岬の突端まで延び切ると、今度は山を切り崩し、谷間を這ひ上り、街の屋並が一段々々と階段形に上へ延びて行つた。赤い斷層が街の思ひがけない處々に、むごい切身をそのまゝに出してゐた。然し一ケ月もしないうちに、そこは平に地ならしをされ木の香りのまだプン〳〵してゐる家が建つた。そこは見晴しのいゝ、空氣のスガ〳〵した高臺になつた。木の繁みの濃い瓦屋根の住宅地が出來て行つた。

汽船が入つてくると、階段形になつて、綠の木立と處々に赤い斷層をもつたこの港街は美しかつた。――一番下の稅關や倉庫や運河や大きな汽船會社のある海岸通り、その一つ上の銀行や會社や大商店のあるビルヂング街、その又上のカフエー、喫茶店、夜店のあるまばゆい遊歩街、更にその上に公園や學校やグラウンドのあるこんもりした綠の場所があつて、山の手の住宅地に續いてゐた。――その一段々々がそれ〴〵の電燈の濃淡をもづて、ハツキリ見分けがついた。それらは又そのまゝ暗い港の

海にキラ〳〵と倒さに映つて、搖れた。

甲板の上で船員たちが耳をすますと、街を疾走してゐる自動車の音や、屋並をくゞり、崖下を縫つてゐる汽車の音が、海を傳つて響いてくることがあつた。時には、夏の夜など明るいアスフアルト街の上をゾロ〳〵歩いてゐる澤山の人の流れるやうな足音さへも聞えてきた。

山の手の家の縁側をあけると、坐つたまゝで、永い冬の間に雪に痛められ黑ずんだ色々な屋根の起伏を越して、港が一眼に見えた。入つてきた汽船の錨を下ろす音や又捲き上げる音が、手にとるやうに聞えてきた。目が暮れると、古い割箸でも置いたやうに見える防波堤の切り目と切り目——その、港の入口の兩端れにとりつけてある赤と綠の燈臺が、一定の時間をおいて、代り代りに明滅するのが見えた。電燈がつく度に、赤と綠の光が暗い海にサーツと長く尾をひいた。

北風はシベリヤから直接に吹いてきた。それは港の波を怒らせ、屋並々々の戸をガタ〳〵いはせ、乾いたホコリを吹きあげ、山の手までくる、——然し、そこまではとゞかなかつた。繁つた木立がそれを防いだ。

稅關や高層なコンクリート建ての倉庫や製罐會社のある波止場には、運河が掘りめぐらされて「埋立地第一號」「埋立地第二號」といふ風になつてゐて、それを繼ぐワーレン式橋梁が到る處にかけられてゐた。煤煙や塵芥やパン屑で濁つた、半ば腐つたやうな臭氣を放つてゐる。水を泡立たせながら、ポン、ポン、ポン……と、煙の輪をはいて發動機船がしきりなしに、橋の下を潛つて出入した。

運河の岩壁には色々な記號をもつた倉庫や保税倉庫が重い鐵の扉を開いて居り、そこから、直接に艀の上に荷物の積みおろしをしてゐる。――澤山の帆綱を持つた漁船、發動機船、艀、帆船、サンパンがづらりと竝んでお互の船ばたを擦り合ひ、ぶツつけ合ひながら、岩壁につながれてゐる。小蒸汽やモーターが通つてゆくと、スクリューの波のあふりを食らつて、それらの船が激しく身體を搖すつた。

そこでは荷揚人足が何十人も一列に、タオ〳〵と撓はむ「歩み（板）」を渡つて、或ひは糸を、或ひは雜穀を擔いで、倉庫の暗い入口を出入りしてゐた。大福やアンパンやラムネを箱の上に竝らべた「物賣り」の女が、行きかへりの人夫たちにひやかされて、負けずロをかへしてゐる。

錆ついた錨や一つ一つが大人の腕よりも太い鎖（チェーン）が置き捨てになつてゐる陰に――思ひがけなく印半纏をきた男が、ゴロリと口をあけ仰向けに寢てゐた。

税關の見張りの下が、旅客や船員だけの乘り降りする棧橋で、小さな岩壁が港に突き出てゐた。何丸が着いて、船員が上陸してくる頃になると、あいまいやの女がそこの手すりに寄りかゝつて、沖を見ながらブラ〳〵する。――夏の夜、さういふ襟足を下げた女が、何人も團扇を使ひながらやつてきた。

埋立地には臨海鐵道が延びてゐた。汚い貨車が、眞黑な石炭の山や木材や角材の置場を縫つて、始終やかましい響をたてながら、行き戻りして、入換をしてゐた。その邊には、北海道の奥地から集ま

つてくる青豌豆、小豆、大豆がカントン袋に入れられて、ザン壕のやうに積まさつてゐた。コール・ピーヤー（高架棧橋）の勾配を、バツシュ〳〵と白い蒸汽の輪を吐きながら、小さい古い型の機關車がオテセ（大型鐵製石炭車）を引いて行く。それが小さく見えた。コール・ピーヤーにはどんな汽船でもそのまゝ横付けになつた。そこのジョウロから汽船のタンブルに石炭をズリ落す音は、海を傳つて棧橋のところまで聞えてくる。

五時を過ぎると、ビルヂングや銀行街は、色々な建物の口から溢れた人で一杯になつた。それらの人たちはその街路から、一街路づゝ階段形に高まつてゐる通りを幾つも横切つて山の手の方へ登つて行つた。濱人足や工場の勞働者は港町通りを、街の兩端の方へ歸つて行つた。——發動機船の行き交ふせわしいポン〳〵いふ音、汽船でならす銅羅の音、チエーンをまく音、人足の喚ぶ聲、石炭貨車の打ち當る音、地響をたてながら木材や鐵板やレールを荷おろししてゐる音、船のきしむ音……それらが夕暮のジト〳〵した鹽ツ臭い風に吸はれるやうに低く、薄れて行く、——そして電燈がまたゝき出し、夜が來た。

街の中央はまばゆい電燈の光で、溢れるやうに輝やいてゐた。然し兩端の街は——夜になると深い谷底のやうに暗かつた。點々とついてゐる電燈は、どれも黄色ツぽく、薄ぼんやりしてゐた。——そこは場末で——勞働者ばかり住んでゐた。「お前さんは何の職業かね？」と訊かれると、この街の勞

働者は自分の職業を云ふ代りに「手宮町に住んでゐる」と云つた。それが答になつた。それで街の人たちはそこの境目である崖山の切り通しを通つて、手宮町の方へ向つて歩いて行くのを、誰かに見られるのを嫌つた。

同じ小樽の街ではあつたが、手宮の人たちは街の中央に出掛けて行くのを「小樽へ行つて來る」とか「まちへ行つてくる」と云つた。

手宮の街の中央には河が流れてゐて、その兩側が高くなり兩方の屋並が向ひ合つてゐた。どの家も煤けた同じ型の長屋で、それが階段に沿つて規則正しくならんでゐた。然し下の方へ移るに從つて、屋並が亂れ、汚い小さい家がゴチャ〳〵に固まり、押しあひ、へしあひしてゐた。

河しもの、活動常設館のある少し廣い通りに「公設市場」があつて、その附近の道端に「市」が立つた。ビールの空箱の上に戸板を渡して、魚や、野菜や、澤庵や、豆腐や、煮豆や、佃煮をならべたのが兩側にぎつしり竝んだ。それらの屋臺に挾まれて、テキヤまでが店をひろげた。——その邊は何時でもジュク〳〵としめつぽかつた。三時か四時になると、どの家からも女達が手かごを持つて、そこへ集つてきた。赤子を帶で背にくゝりつけた女や、子供の手をひいてゐる女、胸をはだけて大きなだらりとした乳房を出した女……が、その前に重なり合ふやうにひしめき合つた。そしてガヤ〳〵としやべつたり喚めいた。

屋臺商人が臺の上をヤケにたゝいて、てんでに叫んだ。

「さア、まけた。さア、投げ賣りだ。さア、買はねえか。これでも買はねえか。」

バナ、賣りは鉢卷で顏の汗をぬぐひながら、負けないモツと大きい聲を出した。背の子供が手足をバタ〳〵させて、泣き出す。相手を呼ぶ聲、足を踏まれた聲……それがゴツちやになり、こねくりかへつた。人いきれ、果物のすえた匂ひ、漬ものゝ匂ひ、生臭い匂ひ……それらが一緒にムン〳〵渦をまいた。家へ歸つてきても、その匂ひはしめツぽく着物にしみこんで、なか〳〵拔けなかつた。

それから二つばかり道路を横切つて下がると、石造やコンクリート建ての倉庫が竝んでゐた。雜穀の積みおろしで、その附近には豆類がこぼれ落ちるので、女たちが袋を背負つて小さい笊と手ほうきを持つて、それを拾ひに澤山やつてきた。倉庫と倉庫の間はひんやりとして、なよ〳〵したペンペン草が生えてゐた。夜遲く、巡査が懷中電燈をもつて、その小路を見廻はつて歩いた。夜業歸りに、女工と男工がよくそこの暗がりに入つて行くからだつた。

倉庫を越すと、築港の埋立地の運河を挾んで工場が竝んでゐた。工場の太い煙突から吐き出る煙が、運河の水を濁し手宮の町の屋並低く這ひ下がつて行つて、屋根を汚し、道路を暗くし、窓といふ窓から家の中に押し入つた。道端やグジョ〳〵した小路を馳け廻つて遊んでゐるどの子供の鼻穴も煤煙で黑くなつてゐた。橋の袂や處々の街角に植ゑてある樹の葉に手をのばすと、指先きが眞黑になつた。この街の澤山の家では時計を持つてゐなかつた。そして工場の汽笛で、時間を聞き分けて、その用を足してゐた。道で遊んでゐる子供がひよいと耳をそばだてゝゐると「あゝ、モウ父ちや歸るぞ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

と云つた。

市場のあるところから下へ行かないで、河を越して右へ二三町入ると、何百軒といふ「曖昧屋」がのきをならべて、色々な小路一杯に立てこんでゐる。入口に「即席御料理」といふのれんを下ろして薄暗くしてある土間に女が立つてゐて外の通る男を呼んだ。その「曖昧屋」の間々にハメ込まれたやうな表だけにペンキを塗りたてた安ッぽい「バー」が、無茶苦茶な喧しい蓄音器の音を往來へ吐き出してゐた。船員がサンパンで上陸してくると、みんな此處へやつてきた。こゝにゐる女達は、汽笛の音色やその鳴り方で、何船が入つてきたのか、又は出て行くのか、知つてゐた。——それらの女はどれも北海道の奥地の百姓の娘や、近海の小さい漁夫の娘で、太い、赤い腕をして、荒ッぽい言葉を使つてゐた、そこの通りの入口に竝んでゐる藥屋や洋品店や小間もの屋は、どこでも「サツク」の看板を大きく出してゐた。

手宮の街——と云つても、それは一様ではなかつた。近代的な大工場に通つてゐる勞働者は、それでもキチンとした小綺麗な家に住んでゐて、二三本樹の植ゑてある小さい庭位は、持つてゐるものもゐた。役付職工などは一戸建のうちに入つてゐた。それは見晴しのきくところに建つてゐた。町工場や謂はゞ少し大きな鍛冶屋などに通つてゐる勞働者も、またさつぱりした長屋に住んでゐたが、濱人足や沖仲仕や出面取りなどは、グジョ〳〵と濕ッぽい、幾つも折れ曲つた小路にさゝり込むやうに密集してゐた。そこでは空が兩方の家の羽目板に狹ばめられて、帶より細く見えた。晝でも、足元に氣

をつけて、一歩々々拾つて歩かなければならなかつた。夏になると、どこでも家の中には燻しをかけて表通りの片側に涼臺を持ち出し、女たちはさらしの襦袢と腰巻だけになり、男たちは猿又か褌だけになつて、團扇を持つて涼みに出た。家の中はゐたゝまらなかつた。

表通りは、勞働者相手の小さい商店や、ゴツ〳〵した木の椅子を五つ六つ竝らべた支那そば屋、一杯屋、白いのれんをさげた氷水や、おかみさんが大きな乳房を出して、赤子を横だきにして店先きに坐つてゐる小間ものや……がならんでゐる。——この街の人達はアンパンマンジウ買喰らひや、それから「モツキリ酒」などをひツかけるものが多かつた。

全體がゆるい勾配になつてゐるこの街を三町程上つて、右に入ると、「朝鮮人」ばかりの一劃だつた。そこに住んでゐる朝鮮人は日雇や土方や積取人夫だつた。家が入り混んでゐて通り全體が臭かつた。子供たちは道端の地べたにそのまゝ坐りこんで遊んでゐた。見慣れない人が通ると、遊びをやめて後からゾロ〳〵とついてきた。薄赤い髯の延びた柄の大きい男が、よく家の前の臺の上に、口をアングリ開けて、寢てゐた。——この邊では時々喧嘩が起つた。お互が組と組に分れて、毆ぐり合ひをはじめた。港の荷物の揚げ卸しや、土方でも日本人の勞働者よりも賃銀が安く、それに何時間でも働かせられるので、資本家は喜んで朝鮮人を使つた。それで日本の勞働者とは仲が悪かつた。

それから、この街には處々に、ガタピシと歪んで、今にもよろめきさうな、何十といふ粗末な窓を持つた——たゞ圖體だけの大きい、三階位の古ぼけた建物が立つてゐた。いくら貧乏でも、そしてそ

れがどんな小路の奥まつた處であらうと、とにかく一軒の家に住める人達はまだよかつた。このどうにもならない圖體の大きい家の一室々々に住んでゐる何十といふ家族、何十人といふ獨身ものは、皆それ以下の人ばかりだつた。廊下といふ廊下の板が鰯のやうにしのりかへつてゐた、歩く度に吃驚するほど大きな音をたてゝきしんだ。階段は歪んでゐて、垢でネト〳〵と黒光りしてゐた。誰かゞ二階か三階の廊下を走つたりすると、家全體がユラ〳〵と揺れた——色んな室から赤子が泣き喚び、母親が怒鳴つた。何處かで喧嘩が起ると、どの室からも男や女や子供が一齊に飛び出した。

これらの古ぼけた圖體の大きい建物は、大抵その大家の名前を取つて「山田ビル」とか「岩城ビル」とか「大山ビル」といふ風に呼ばれてゐた。然しそれらがビルヂングでもないのに、どうして「何々ビル」と呼ばれてゐるのか誰も知らなかつた。

そのうちの一つである「岩城ビル」は、切り通しの近くに立つてゐる。

——龍吉たちの一家はそこの一番下に住んでゐた。

二

龍吉が父と母に連れられて、秋田の田舎から出てきたのは七ツか八ツの頃だつた。それは冬で、津輕海峽の海面が暗く荒れてゐた。彼は（よくは分らないが）その暗い荒れ狂つてゐる海に、ゲー、ゲーと黄色い、ニガイ汁を何度も嘔した事も覺えてゐる。——彼が汽車といふものを見たり、汽船とい

ふものに乘つたり、（その時は蒸汽と云つてゐた）……したのはそれが始めてだつた。

彼は頭の大きい、鼻の低い子供だつた。汽車にも醉つたし汽船にも醉つて、始終眉を不機嫌に寄せて、母親の袖に吊り下がるやうにつかまつてゐたが、――それでも見るもの、聞くものが皆めづらしかつたので、彼は後々まで、その時の心よい記憶を持つてゐた。彼は、何故に自分たちが汽車に乘つたり汽船に乘つたりするのか分らなかつたが、さうしてゐるのが大變樂しいことに思はれたし、又何處か樂しい處へ行くのではないかといふ風にも考へてゐた……。

龍吉は今では、秋田の村に居た時のことをそんなにはハツキリ覺えてゐない。何か或る事をしてゐるときに、少しの聯關もなく、フト頭に浮んでくることがある。それがどこか心覺えのある氣がして、――さうだ、小さい時にそんなことがあつたやうだと、氣付くことがあつた。それは非常に偶然なキツかけからくることで、自分から、小さい時のことを思ひ出さうとしても、それではなか〳〵ひ浮んで來なかつた。

然し村にゐた時のことを考へれば、何時でも浮んでくるのは、彼がカン〳〵と燒きつくやうな日照りの中に、土を積んだトロツコが急勾配をブレーキを締めながら、風を切つて疾走してくるのを見てゐる自分の姿だつた。トロツコには男と女が一組乘つてゐた。男の方が片足を土枠にかけ、身體を思ひツ切り眞ツ後にそらしながら、ブレーキを締めた。レールは危い崖鼻のフチに沿つて、カーブを描いて極めて不完全にガタピシと設けられてゐた。トロツコで運んで來た土は次々とその崖鼻から谷底

に落された。――その谷を埋めて、そこへ鐵道を敷設するために、土工部屋がたつてゐたのだ。田や畑の仕事だけではとても食つて行けなかつた百姓が稼ぎにやつてきた。

昔とは違つて、色々な身の廻りのものや、家で使ふものや、土間で稼げる内職仕事をやつてもそれでは間に合つて行かなくなつてゐた。さういふものは、ドン〳〵安い値段で――逆に街から村の中に流れ込んできた。内職の仕事でやうやくその日暮しを立てゝゐた百姓は、ハタと手をこまぬいてしまつた。何重にも頭をハネられながら、前借をして、北海道の「鰊」の漁場に出かけて行つて、村を空けるものが多くなつてきた。龍吉たちの村ではそれを「雇を賣る」と云つてゐた。二月の終りに村を出て、五月の節句頃までに村に歸つてきた。漁場へ行かないものは、木材の切出しに、山へ入つた。然し七月八月の農繁期になつても、百姓たちは身體を無理して、日雇に出た。

龍吉は、百姓である自分の兩親が田の中で働いてゐる姿をあんまり思ひ出すことが出來なかつた。そして、たゞ自分が鉢の開いた大きな頭に日をカン〳〵當てながら、土いきれのムツとする赤い地膚を出して切り崩されてゐる崖の側に立つて、父と母がトロツコのブレーキを締めながら彼のそばを風のあふりを立てゝ疾走していくのを見てゐたことしか覺えてゐなかつた。それは今から考へてみても、奇妙な記憶だつた。

土まみれになつた顏に、油汗がカタを殘してデリ〳〵と流れ、それが日中の光で赤黑く光つてみえた。父はそれをシヤツのまんまの腕でぬぐつた。必死の面持でブレーキをしめながら、それでも龍吉

を見付けると、笑つて何か言葉をかけた。龍吉はそんなとき、ハツ！　とした。何んだか、それを瞬間に、父と母の乘つてゐるトロツコが思ひツ切り、もんどり打つて、崖鼻から突き落ちてゆくのではないかと思つたからだつた。子供ながら、父と母が笑つてくれなければいゝと思つて、ハラ、ハラした。

或る日、龍吉は「バヾ」が拵らへた瀬戸の辨當を風呂敷に包んでもらつて、トロツコの走つてゐる道を登つて行つた。それは毎日彼が持つて行くことになつてゐた。暑いので、彼は着物の裾をまくつて帶に挾み、瓢簞形の小ツちやいチンボを出したまゝ、その頃丁度覺えかけて、それが樂しみになつてゐた口笛を、片言のやうに吹きながら、崖鼻を廻つて行つた。その時龍吉は突然グイと肩をつかまれたやうに、尖らした唇のまゝ立ち止まつた。――突然、角を曲がつてきたトロツコが傾いたと思つたのだ。と、浮き上つた片側の車輪が音をたてゝ空まはりした。そして次の瞬間には、トロツコはもんどり打つて、レールの向ふ側に見えなくなつてしまつてゐた。それは僅かの間だつた。龍吉はアツとも聲が立たず、唇をとがらしたそのまゝだつた。そしてトロツコが見えなくなつてから急に、あ、あ、あ、あ……と聲をあげながら、走り出した。それが父と母のトロツコである氣がした。――然しその三つ位後に來たトロツコに父と母が乘つてゐた。泣きべそをかきながら、走つてくる龍吉をみると、父と母は手を振つてみせた。彼は急に力が抜けて、へな〳〵にそこへ坐つてしまつた。――彼はそんなに安心したことがなかつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook